

みなとメディアミュージアム
MIMI

みなとメディアミュージアム
2020→2021

みなとメディアミュージアム
2020→2021
記録集

みなとメディアミュージアム 2020→2021



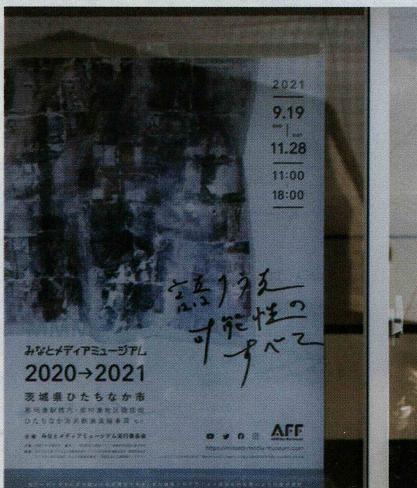
みなとメディアミュージアムは、茨城県ひたちなか市那珂湊地区を中心を開催する地域芸術祭です。毎年、全国からアーティストを募集し、厳正な審査を経て、出展作家を選出します。出展された作品は会期中、那珂湊の駅やまちなかを中心に、ひたちなか海浜鉄道沿線や車両内にも展示されます。

また、ワークショップやその他の関連事業の運営も行っています。

MMMは「産（主に那珂湊地区商店街、ひたちなか海浜鉄道湊線）+学（主に教育関係者）+芸（アーティストおよび美術関係者）」の三者からなる実行委員会により運営されています。2009年に第1回目のMMMを開催以降、毎年開催していましたが、2020年は新型コロナウィルスにより初の中止となり、2021年は2年ぶり12回目の開催となりました。

index

Minato Media Museum (MMM) is a local art festival held in Hitachinaka city, Nakaminato area in Ibaraki prefecture, for two to three weeks every summer. Every year, we invite applicants from all over Japan to showcase their work, which are shown at Nakaminato station (city center) along Hitachinaka Seaside Railway inside train cars. We also organize and host some workshops and events. Our event is held every year since 2009, and this year, we are holding the 12th annual Minato Media Museum festival.



- 02 MMMについて
- 04 共同代表あいさつ
- 08 みなとメディアミュージアム2020→2021大賞
まちづくり3710実行委員会賞
『神話行列～降臨道中～』・エコツミ・
- 10 審査員特別賞
『隣の景色』 濵木 智宏
- 12 常磐大学M4賞
『転がる私の杖の先、ここにいるよとカラスは鳴いた』
廣野 鮎美
- 14 ひたちなか小売商業経営研究会賞
『那珂湊で働く人々を描く』 君嶋 海裕
- 16 『Time Line』 Elliott Haigh + Nana Sawada
- 17 『船窓トポリサイタル』 三本木 歳
- 18 『自然を操る妖精の存在を感じた』 柴原 薫
- 19 『空き家おくりびと みなどのでんしゃ編』 やあべそい
- 20 『MY PLACE -那珂湊の私の場所-』
法政大学国際文化学部稻垣立男研究室
- 21 『かっぱのきもち・おひとついかがですか』 伊藤 沙織
- 22 『那珂湊第一小学校ワークショッププロジェクト』
43+宝塚大学東京メディア芸術学部
- 23 『那珂湊はいいぞ!2021』 中村 やす
- 24 クラウドファンディング
『アートを買って芸術祭を応援する』
- 26 note
『MMM みなとメディアミュージアム』
- 28 協賛企業

共同代表・キュレーション班代表 あいさつ

キュレーション班代表 臼田 那智

終わりの見えないコロナ禍で、延期に延期を重ね、今年度のMMMはなんとか開催まで漕ぎ着けました。予測できない感染状況で、正解のない開催方法を模索していくことが最も難しい課題でした。

そんな中でも、アーティストの方や地域住民の方と、「なんとか頑張ろうよ」という気持ちを一つにできたこと、それが唯一の救いでした。このような状況でしたが、アーティストの皆さんは本気で良い作品を作ろうと取り組んでくださり、それを地域住民の方々が懸命に支えて下さいました。「那珂湊に来てくれてありがとうございます」「作品を支えてくれてありがとうございます」という感謝の意を、関わった全ての方の顔を思い浮かべながら、改めて伝えたいと思います。本当にありがとうございました。



MMM2020→2021の開催にあたり、応援・ご協力いただいた全ての方々に感謝申し上げます。

2020年度にMMMに参加した私にとって、今回が初めての芸術祭開催でした。新型コロナウイルス拡大によって、アーティストや地域の方々と思うように現地で対面コミュニケーションが取れない中、リモートやウェブ上で作業を進めていくにあたって行き詰まることや見通しが立たず不安になることが多くありました。しかし「那珂湊の地でこの作品を作りたい」「またMMMを開催したい」という沢山の方の熱い思いを目の当たりにしたこと、私自身心を打たれたことが幾度となくありました。MMMは点としてのイベントではなく、年間を通して那珂湊と芸術に携わっています。線としてのMMMをこれから先の未来に残していくためにも、一刻もと変わりゆく社会状況に負けることなく、引き続き個性豊かで多様なメンバーと力を合わせ繋いでいきます。どうぞ、今後のMMMもよろしくお願ひいたします！

橋本 優花

共同代表

キュレーション班代表 佐々木 樹

アーティストとして2019年に参加させていただき、その後にご縁があって2020,2021年はキュレーションを担当する実行委員として参加させていただいたみなとメディアミュージアム。

小規模ではあるものの、その分より濃い密度の人との繋がりや場所の質感を感じすることできる本芸術祭は駆け出しのアーティストであった私にとってとても魅力的なものであったが、新型コロナウイルスの猛威によってそれらの魅力を感じること、感じさせることが困難になり、芸術祭自体やリサーチの在り方もバラエティシフトを迎えたように思う。そうしたシフトチェンジはアーティストにとっても実行委員にとっても、突然訪れた想定外の大きな制限のように感じられたことは事実としてあるだろう。しかし中で、諦めず真摯にチャレンジブルなアプローチをして新たな場所、人との関わりの在り方を示してくれたアーティスト・実行委員の存在はとても心強いものであった。

これからも世界・社会の動向に合わせたシフトチェンジは続くことは事実避けられないことで、ある場所に関わりを持って制作・リサーチをする試みは少しずつ無くなってしまうものなのかもしれない。そんな弱気に倒れそうな私に出会う時、みなとメディアミュージアム2020→2021の記憶は「まだ諦めてはいけないよ、これから一緒に新しい方法を探そう」とそっと声をかけて背中を支えてくれる勇気のようなものとしてあり続けると思う。そうした存在を形づくり残してくれたアーティスト・実行委員、そして何より那珂湊という地域に対して、心よりの感謝と敬意を示したい。



What we can do is to meet people we have never met, come into contact with new things, and experience events through MMM.



共同代表 小川 楽生

思い返せば、私たちは、これまでどの「芸術祭・イベント・社会活動」も経験したことのない、予測不可能性に満ち満ちた時期を走り抜けてきました。2021年の秋に開催することを決定した際に、参加アーティストに対して「(開催決定は)文化芸術の矢面に立つ覚悟の表示です。開催にはあらゆるリスクが伴います。リスクの上に成り立つ「語りうる可能性のすべて」をなんとしても伝えていく所存です」とお伝えしたこと思い出します。その覚悟の結果、地元住民からも「今までのMMMのなかで一番手応えがあった」と嬉しい声を頂くことができました。今年度の大賞受賞作品パフォーマンスでは、社会のなかでリアルな「声」をあげることがどれほど尊いものか、ひしひしと実感しました。こうしてMMM2020→2021を可能にしてくださった皆さまに、改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました！

そして、きっとこれからも、私たちは覚悟しつづけます。覚悟するということは、予感することでもあります。アートがある一点を撃ち抜いて、誰も予想しない豊かな響きをもたらしていくことを。不透明度を増していく社会に非決定的に抗うことを。



羽賀 優希

共同代表



Exhibition of works

神話行列～降臨道中～

コロナ禍が始まって久しい。無力さや孤独感に向き合うことも増えた。けれど、それらを抱える私たちは太古から連綿とつながっている大きな流れの中にいる。いつだって、ひとりではない。豊かな自然に端を発する日本神話。その日本の神々はけっして完璧な存在ではなく、時に怒り、時に嫉妬し、笑い、泣く。よりよき存在になるための道中にいるのだ。そんな「神々」はたしかにこの地上に生きて、息づいている。豊かな海に恵まれた那珂湊のように、すぐ隣にいる。本作において天界から地上界へ降るのは、アマテラスの孫ニニギノミコトとその一行。故郷を離れる彼らは悩み、戸惑い、振り返り、それでも前を向く。私たちも現在においてまたそれを繰り返す。那珂湊の産土様ともいえるふたつの神社を行列でつなぐ「降臨道中」を通じ、土地に生きる日本神話や、自己や他者内に息づく神話的要素の片鱗を感じてみてほしい。共に作り上げる参加者は異界と現実をつなぐ架け橋となる。



・エコツミ・

Ekotumi

神話をモチーフにするアーティスト／シンガーソングライター／小説家。
早稲田大学卒。神社検定1級。歌と舞を用い、日本神話に独自の解釈を加えた「新訳古事記シリーズ」を展開。2015年以降は世界各国でコンサート公演を行う。Anderson Sudario 氏とのインタラクティブアート作品で KDCC 北九州デジタルクリエーターコンテストを受賞。パフォーマンス映像がベルリン「WomenCinemakers Biennial2018」に選出される。コロナ禍の中、世界中の風景音を用いた音楽作品群や飛沫を考慮して作成された歌い舞うホログラム「リトルゴット少名毘古那」を制作。

みなとメディアミュージアム2020→2021大賞 まちづくり3710実行委員会賞

コロナ禍によってさまざまな活動が制限されるなか、元町みろくをはじめとした地域住民を主体的に巻き込み、しばらく忘れかけていた興奮とともにアートが持つ力の可能性を見ることができたという点において「語りうる可能性」が掲げられていたものであると評価し、MMM2020→2021の大賞受賞作品に選出しました。

日本神話というモチーフを現実離れさせることなく、日常的な物語行為に落とし込むための、地域住民との綿密な練習は、単に技術的な向上だけなく新たな繋がりをも構築するものでした。パフォーマンス終了後に参加した皆さんが物語った言葉たちは・エコツミ・さんのパフォーマンスによって生まれた繋がりの現れといえるでしょう。

「エコツミ・さんが歌い始めたときに、自然と、涙がスッと出てきたんです。」「レッドカーペットの上を歩いているような気持ちで歩きました。」「この場にいられて本当に嬉しかったです。」

この土地に住む人たちの口や身体や声を通して、神々たちが顕現するという身体知的アプローチはまさに、地域住民・彼ら・彼女ら・そして私たちにとっての「語りうる可能性」を拡大させていくことでもあり、アーティストたる・エコツミ・さんの「語りうる可能性」をこの場でしか表現し得ない、ただ一度きりのハレの顕在化として確立させることに役立っています。

私たちは日々どこかで祈り、期待し、落ち込んで、ケである日常の絆の中に生きています。ケである日常に堆積していく断片たちをアートというメディアムが緩やかに繋ぎ合わせ、日常では響きにくい声と言葉をパフォーマンスを通じた神話作用によって外在化させることは、我々みなとメディアミュージアムが目指すものと強く響き合います。

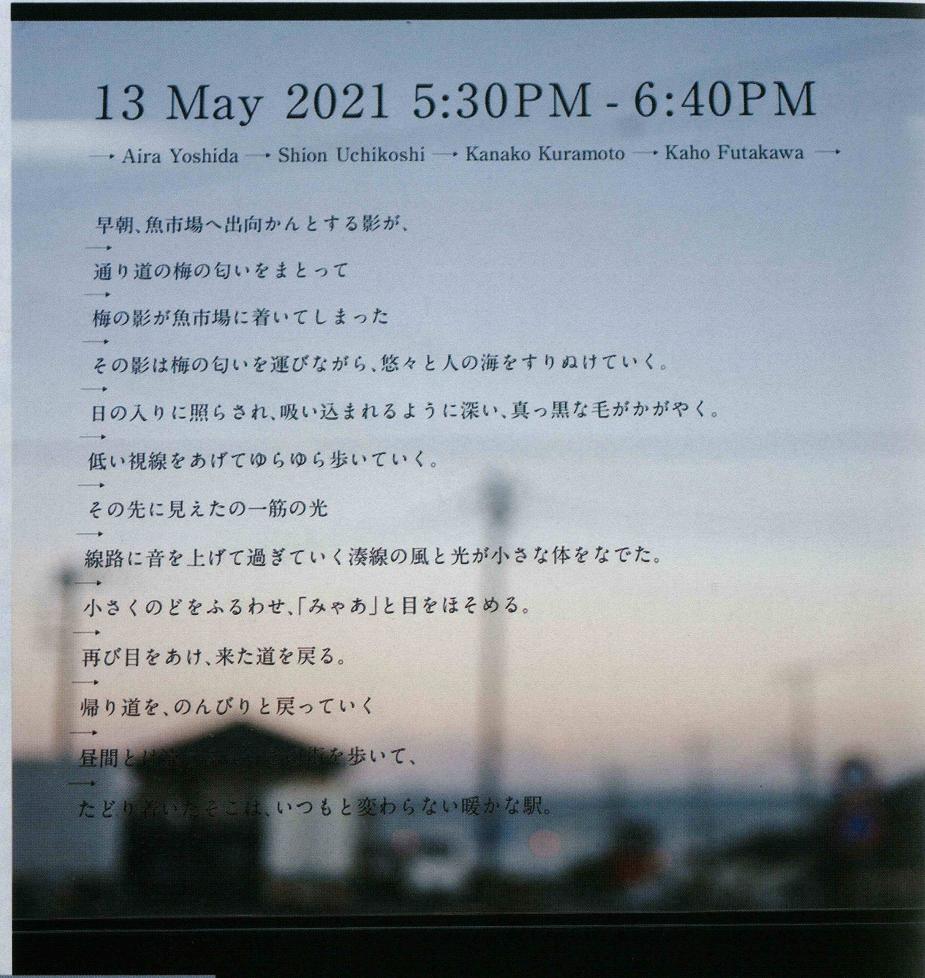
「アートにふれることなくしては出会うことのできなかったヒト・モノとのつながりによって、新たな地域の資産を、あるいは形としては残らずとも価値のある経験や体験を生み出すことを目指します。」

・エコツミ・さんのパフォーマンスによって、「あのときこんなことがあったよね」「あのときのこと、覚えてる？」と、那珂湊に住む人々たちや私たちがいつか思い出し語りうる可能性の大きな種を、豊かな響きとともに撒いていただいたことを、みなとメディアミュージアム実行委員会一同は誇らしく感じています。（みなとメディアミュージアム2020→2021実行委員会評）



隣の景色

ひたちなか海浜鉄道湊線に思いを馳せ、那珂湊にゆかりのある人達と共に歩く即興での物語作り。地域の様々な人達とオンラインや対面でのワークショップを重ね制作した。それぞれの個の中にある湊線の情景を言葉でつなぎ合わせ、私の湊線の記憶に他の記憶が織り混ざり、私であって私ではない湊線の景色を表出させる。



瀧木 智宏

Tomohiro Shibuki

1986年北海道小樽市生まれ。武蔵野美術大学卒業。

【近年の展覧会】2017年 個展「線分」／クラークギャラリー +SHIFT 2019年 個展「WOOLD」／CIBONE 2020年「Denchulab02019」／旧平櫛田中邸 2021年「UNMANNED 無人駅の芸術祭」／大井川

審査員特別賞

日常の風景に優しく作品が浸透し、乗車した多様な人たちへ語りかけるコミュニケーションの可能性を提示する作品だと感じました。誰かと誰かの言葉のリレーの末にバトンを鑑賞者に譲渡し、もし (if)自分ならと心の扉を開き、「もしもし」とまた誰かに言葉を紡いでいく…作品の構成要素はシンプルでありながらも、その受け取り方や感じ方は多様で、また鑑賞する状態や状況によっても様々に変化する非常に豊かな鑑賞体験を得ることができます。

また、公共空間であることを前提とし、誰のことも脅かさない（作品の視認性やフォントのバランス等も配慮した）絶妙な空間の設計にも優れた目配りと気遣いを感じます。また、一時的閉鎖空間に不特定多数の様々な人が場所を共有する車両という特質上、如何に乗車する隣人への配慮や気遣いを間接的に生み出すかという点においても、ある種緊急性を持った昨今の社会問題への応答と捉えることもでき、そのオリジナリティあるアイデアの汎用性や拡張性に期待が膨らみます。また、エコツミさんの街に伝わる古来の伝承を受け継いだ表現と比較し、個人の物語（それは無意識的・感覚的・断片的であったりする）をつむぎながら、ある種誤訳と誤解を重ねながらも信頼をおいて対話を続いている様が、人間の営為の縮図のように思います。またそれは出発点として不完全性を受容し語り手を包摂する意味としても捉えます。

意図せずとも作品が様々な人の目に留まり心の琴線に触れ、語りうる可能性を匿名ではない各個人へと委ね、射程を広げ創造性の豊かさに貢献している点に高く評価します。（小國陽佑評/NPO法人芸法代表）



《転がる私の杖の先、ここにいるよとカラスは鳴いた》

はじめに、ここで暮らす人が那珂湊に抱く感情について想像した。ここで生まれ育った人もいれば、そうでない人もいて、故郷だと言う人もいれば、そう言い切れずにいる人もいる。人の数と同じだけパターンがあるだろう。それはどんな土地でも当たり前だが、まず考えるべきことに思えた。そして今年春、那珂湊をひとり歩いた。自分でも驚くほど、様々なものに出くわした。今回はそれらの持つ言葉を、自身の想像を交えながら引き出していく作業に努め、いくつかの映像と写真、しぐさをここに広げてみることとする。これを、どこに行っても付き纏う、居場所・所在の問題について考える材料としたい。

《話を振る》

駅の山側にある池、名平洞を訪ねた。図書館の近くにあり、渡り鳥の飛来地だと看板が立っている。細い川にかけられた赤い橋を渡ろうと目をやった時、橋の下に白鳥がうずくまっていることに気づいた。怪我をしているのではと勝手な心配をしながら眺め、ふいに思いついて話しかけたのだった。

《新しい道の砂利を蹴り転がしながら歩く》

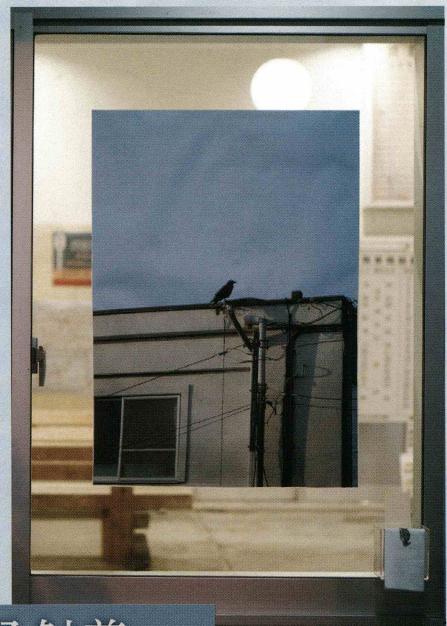
名平洞へ向かう道中に、新しい住宅街が作られつつある。10年ほど前に実家を引っ越した時と同じ光景がここでも見られたことに、少しだけ安心感を覚えた。どこからか運ばれた砂利を一つ拾い上げて蹴りながら、この街をぐるりと一周歩いてみることにした。

《ふやけた石臼》

大洗水族館へ足を運んだ。マンボウは水槽に直接ぶつからないよう用意されたビニールの膜に囲われ、ひたすら口の開閉を繰り返していた。彼らがいた大きな海と、意図せずその口に吸い込まれたものを想像し、マンボウは代弁者なのかもしれないと妄想を走らせた。それで、私はその声が聞きたいと思ったのだった。

《ここにいる》

カラスのように年間を通して同じ場所で生活する鳥を、留鳥と呼ぶそうだ。



廣野 鮎美

Ayumi Hirono

《ここにいる》

アーティスト。
1996年兵庫県生まれ。2019年成安造形大学芸術学部芸術学科美術領域現代アートコース卒業。映像、パフォーマンス、絵画、写真など、手法を限定せずに制作を行う。



《話を振る》

常磐大学M4賞

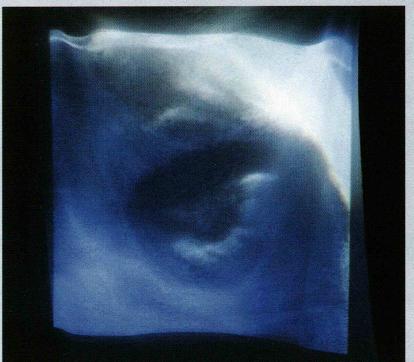
童心に帰るような作者のまなざしと身体感觉から那珂湊を捉えた作品。

来訪者を迎えるカラス、白鳥との会話、石蹴り遊び……てらいのない瑞々しい感性が、多種多様なメディア(ポスター、Map、本、液晶ディスプレイ、プロジェクター、石ころ)と空間構成によって、技巧的に表現されている点も興味深い。スピーカーのサイズ感と床面への設置が的確だったためか、石ころを蹴飛ばす音も妙にリアルに感じられた。

そういった意味では、那珂湊という地域を、「メディア」「モダリティ」「自らの足」異なる3つの視座から横断して構築した作品とも言える。(小佐原孝幸評/常磐大学助教)



コンセプトシート他



《ふやけた石臼》

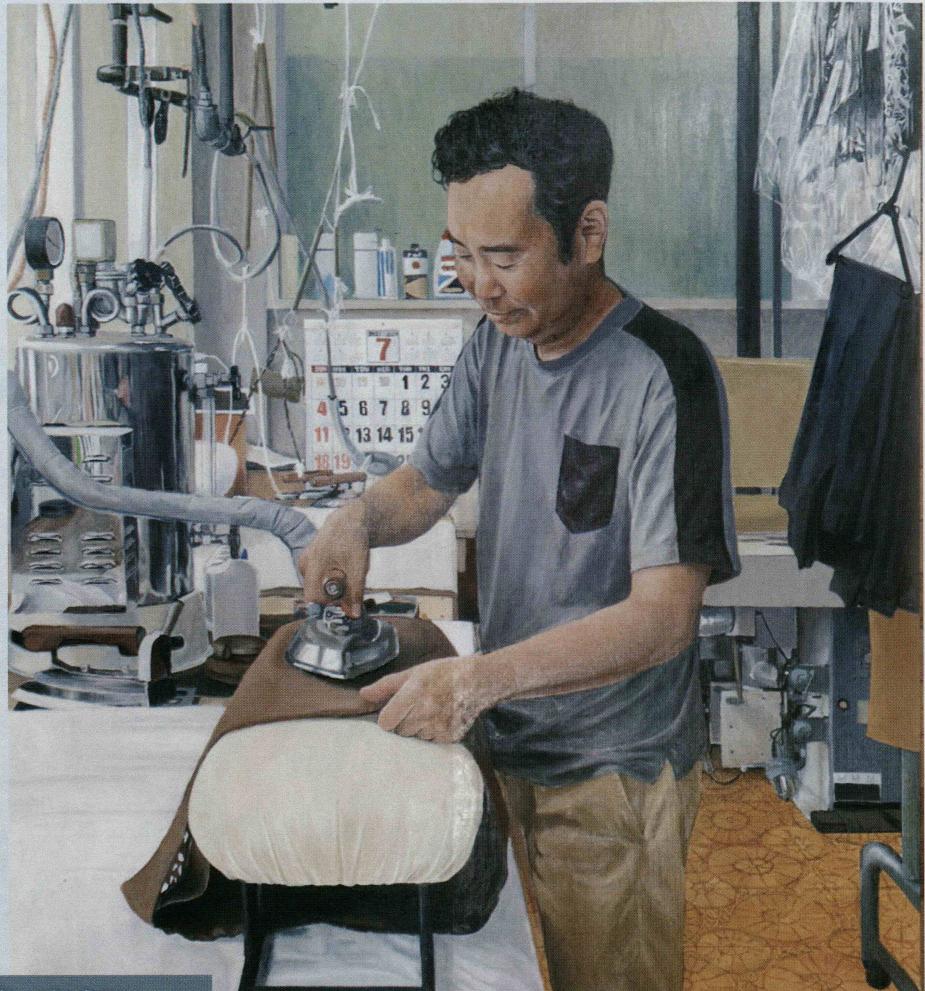


《新しい道の砂利を蹴り転がしながら歩く》



那珂湊で働く人々を描く

私は、MMM に作家として作品を展示するのは 2 回目です。1 回目の作品展示をして強く印象に残ったことは、那珂湊で働き、町をより良い町にしたいと活動している人達の姿です。ということで今回の作品は「那珂湊で働く人達を描く」。那珂湊のお店の人を描き、MMM を通じてその人を多くの方に知って頂き、那珂湊のお店により多くの方が足を運んで下さいますように、という思いも込めて描きました。絵に描いた人は、那珂湊出身、那珂湊のお店で働き、那珂湊の町興しにも積極的に活動されている、とある方です。是非那珂湊で歩いてこの方を探してみて下さい。喜んで那珂湊の話ををして下さると思います。



君嶋 海裕

Umihiro Kimijima

アーティスト。

ものつくり大学技能工芸学部建築学科卒業。2019 年から MMM に参加。

ひたちなか小売商業経営研究会賞

ひたちなか小売商業経営研究会は、地域で商売をしておりまして、経営の勉強や町おこしなどをメインに行なっている組織となっています。そこで、今回は君嶋さんの「那珂湊で働く人達を描く」を受賞作品として選ばせていただきました。「那珂湊のいろんなお店の沢山の人に足を運んで欲しい」という君嶋さんのこの絵への想いが決定理由となります。（川崎達也評/ひたちなか小売商業経営研究会会長）

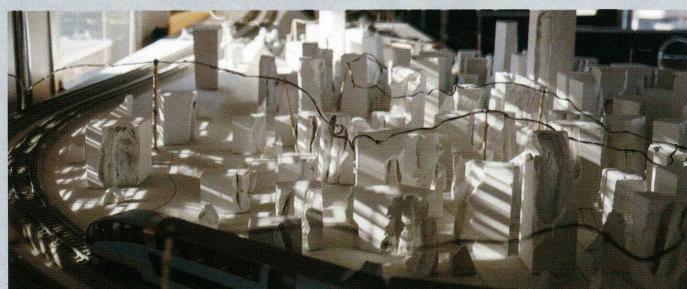


Time Line

この街には様々な時間が眠っています。

過去と現在そして未来をつなぐこの路線は私たちを自然史の断片へと誘います。

日々変わりゆく時の中で私たちはどのような歴史を未来に積み重ねていくでしょうか。



Elliott Haigh + Nana Sawada

私たち はイギリス人と日本人のアーティストデュオです。自然環境への理解を多くの人に深めてもらおうと野生生物や自然界とのつながりを彫刻やインスタレーション作品を通して探求しています。

作品の多くは異なる場所や環境での経験をもとにしたもので す。これらの経験はその場所ならではの素材や形を通して具現化され、それぞれ違うコンセプトを持ちながらも、その土地が持つ自然と社会のつながりを表現しています。

1990年、東京生まれ。私は作品を制作するにあたり、場所のもつ空間的な特質を建築的な視点・思考で読み込み、日常的な観点からは見落とされてしまうような構造や連関を顕在化させることを試みています。そこから喚起されたイメージや認識が、日々の視点への広がりや豊かさへつながっていくことを期待します。主な展示として「ゲンビどこでも企画公募2019展(特別審査員賞受賞)」、「UNMANNED 無人駅の芸術祭 / 大井川2021」等。

Kan Sanbongi

三本木 歓



那珂湊の街の中にふと気になる地点を見つけた。「船窪」と記載があり、マップ上でクリックすると、その領域が赤線で囲われた。この船窪地区は、都市基盤が未整備のため長年宅地化が遅れてきた場所であり、現在、土地区画整理事業による市街地の形成が進められている。変容の最中にある那珂湊の一つの光景、状況がここにある。この街に暮らしている人々にとっては、通り過ぎてゆくごくありふれた日常の光景に過ぎないかもしれないが、私にとっては不思議と心惹かれる未知の領域であり、実際に赴きその状況と対峙してみたいと思った。そもそもここはいつから船窪と呼ばれるようになったのだろうか(この地名は日本にいくつかあり、船底型をした盆地・窪地などの由来がある)。船窪遺跡としてかつて発掘調査が行われたこともあるみたいだ。造成され変容していく地形(topo-)と併走し、喚起された「語り(reciter)」とイメージの場。

船窪トポリサイタル

「自然を操る妖精の存在を感じた」

風を意識した・・・。

湊公園で潮の香りを鼻腔に感じ、反射炉へと向かう道すがら木々の葉擦れの音を聞いた。

名平洞では水面に立つ波に風を見た。

まるで風を操る何者かが葉をかきめて音を立て、香りを運び、波をなで、那珂湊を縦横無尽に走りまわっているような印象をうけた。

忘れてかけていた自然への尊敬の念を思い出す土地柄がと思った。

風を操る者を中心、自然を守る精霊たちを表現した。



柴原 薫

Kaoru Shibahara

花を中心とした植物をモチーフに神話・古典作品に登場する怪異な現象や生物等の、空想と現実を行き来する者をテーマにした作品を創作。日本人の心に受け継がれる自然に対する敬意の感覚を独自の世界観で表現する。亀山トリエンナーレ / インターショナルカラーアワード / ファインアートフォトアワード / 他

1986年 神奈川県生まれ

2009年 多摩美術大学美術学部絵画専攻油絵科 卒業

2011年 多摩美術大学大学院美術研究科 修了

個展

2009年「Diver Down」 CCAA ランプ坂ギャラリー、東京

2011年「眼Q」ストライプハウスギャラリー、東京

その他企画・グループ展多数参加

やあべそい



「空き家おくりびと みなとの電車編」は暗い空き家の中でお留守番をし続けてきた人形・ぬいぐるみに、今のひたちなかや明るい外の世界を見せてあげる旅という作品です。全国的な問題となっている空き家とその所有者の心苦しさの開放をテーマとして他の街でも展示しています。

◆空き家問題と心苦しさについて

これまで様々な空き家の改修・活用事例を見る機会がありました。それは空き家がもたらす光のごくごく一部分に過ぎません。実際の空き家所収者や自治体担当者らと関わることによって、実際は持て余された空き家のほうはるかに多いことを知りました。

空き家を所有している場合、売却・解体・改修などの対応が可能ですが、実際はそう簡単にはいかない法律的な要因が最も大きいのは明らか。しかしそこにすら至らない空き家も多く、理由を問い合わせた結果、空き家の持ち主の心に存在する影【後ろめたさ・心苦しさ】の存在がに気づきました。

◆心苦しさの開放

暗い空き家中で、時を超えて埋もれて続けてきた人形・ぬいぐるみを市民から收集し、「明るい+今」を見せるにしました。人形供養という行為があるように、人形はとても重い存在であり、継承者にとって簡単に処分しづらいものの代表です。一つの場にとどまり続けた彼らに、「移動」という行為を与え、満足できるまで「今」の風景を見せる。そういう機会を用意することによって、彼ら人形は安心して空き家ではないどこかに自然といけるようになる。所有者の心苦しさも徐々に解決されるのではないかでしょうか。

◆なぜ海浜鉄道に乗せるのか

地域にあわせ旅の仕方を人形たちに提供しています。ひたちなかの歴史を学ぶ中で海浜鉄道と人々が、楽しい時代も苦しい時代もともに支え合ったことを知りました。「おらが那珂湊、おらが鉄道」、そういう愛があふれる場に彼ら人形を乗せてあげたいと思いました。

空き家おくりびと みなとのでんしゃ編

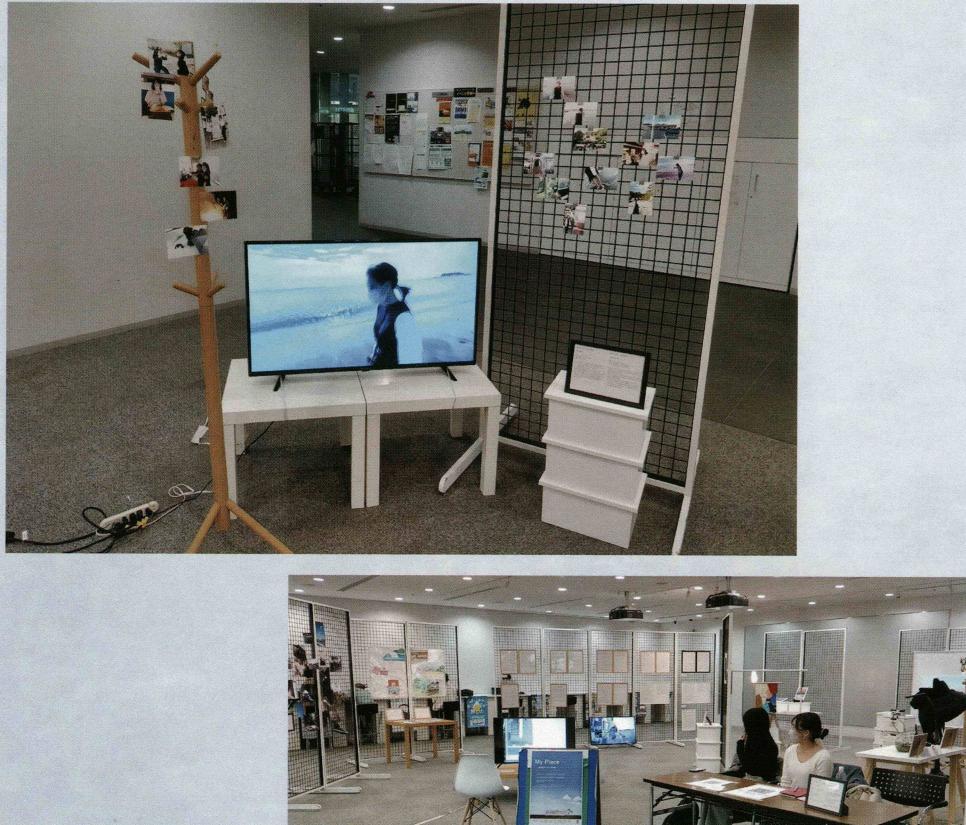
MY PLACE -那珂湊の私の場所-

稲垣研究室では、2020年8月に茨城県ひたちなか市那珂湊でアートプロジェクトを実施することに2019年から準備を進めていましたが、2020年3月以降の新型コロナウィルス感染症の拡大により一旦中止となりました。緊急事態宣言の長引く中、コロナの終息後のプロジェクトの再開を目指して少しずつ準備を進めてきました。

2021年に入り、緊急事態宣言の合間に繰り返して那珂湊でのフィールドワークを再開しました。長期化する緊急事態宣言の中で限られた時間の中で那珂湊の人々へのインタビュー、那珂湊高校の生徒さんたちとのワークショップ、展覧会が予定されている地元のホテルへの訪問を行いました。

2021年11月現在コロナはまだ終息しておらず、那珂湊での展示は実現できずにいます。また、那珂湊高校とのワークショップも延期されている状態です。今までの成果を一旦形にするために稲垣ゼミでは、大学キャンパスで中間報告展を開催し、またこれまでの活動についてオンラインで報告することにしました。

<https://sites.google.com/view/my-place-in-nakaminato/my-place>



法政大学国際文化学部稻垣立男研究室

「コミュニケーションとアート」をキーワードに、アートプロジェクトやワークショップ、作品制作など様々な活動を行なっています。社会と繋がるアートプロジェクトやワークショップに関する研究を軸として、表象文化（現代美術、現代音楽、パフォーミングアーツ、映像作品等）に関する実践と考察を行います。

コミュニティとのコラボを通じて人々の生活や文化を理解し様々な方法で相互の考えを伝えることを経験的に学びます。また、学生各自の関心のある表象分野について考察を進め、その背景となる理論についての研究を並行して行います。

多摩美術大学 美術学部 工芸学科金属専攻卒業。

Saori Ito

伊藤 沙織



ちょっと上を向いて、ただ座っているだけの河童。「何を見ているの？」と目を覗いて聞いてみると、目の前を通り行く人を見送っているのか、空に浮かぶ雲の行方を見送っているのか。誰かが来るのを待っているのか、雨が降るのを待っているのか…。答えてはくれないけれど『となり、あいてるよ』とでも言いたい。ひとりでぼーっと座っているのも好きだけど、いつ誰が隣に来ても良いように、いつでも隣を空けてちょこんと座っている。河童の見つめる先には何があるのか。何を感じ、何を考えそこに座っているのか。そんなことを想像しながら見てほしい作品です。ぜひ隣に座ってそこに流れる時間を一緒に感じてみてください。この作品を見た人がちょっと笑ってしまった、優しい気持ちになれたらいいなと思いながら制作しました。

かっぱのきもち（上写真右）おひとついかがですか（上写真左）

かっぱのきもち・おひとついかがですか

那珂湊第一小学校ワークショッププロジェクト

BANKOKKI1996-2021(43)

毎年、那珂湊第一小学校にて旗をつくるワークショップを行っています。旗は、家庭で余っている布を生徒に持参してもらい、一針一針縫って制作しています。2021年で5回目となり、旗の総数は250を越えました。旗にはおおよそ意味があり、その使用方法によって、象徴であったり、目印であったり、装飾であったりします。観客席の応援団が持っているあの大きな旗は、その団体の“象徴”として、ギラギラした太陽の下、ねっとりとした空気の商店街で目につく水の字の旗は、シャキシャキの冷たい食べ物の“目印”として、ある晴れた日、校庭に吊るされた色とりどりの旗の連なりは、非日常を演じる“装飾”として、の意味を強く持っています。BANKOKKIは1つ1つの旗を小学生に制作してもらい、その個性ある旗をしばしば笑みを浮かべながら良く眺めて並び方を調整し“万国旗”的形式で展示する作品です。それを毎年繰り返します。回を重ねていくほどに、数量も、色や柄のバリエーションも、制作してくれた生徒の数も増えています。象徴、目印、装飾、そのどれかの意味に特化しない個性ある旗の集まりは、大きなうねりとなって、この街の新たな意志の表れのように成長していくことを思います。また、制作してくれた生徒は後に、中学、高校、大学生、社会人となって、旗を見ることがあります。生徒がBANKOKKIで経験した記憶はその旗とともに在り、その記憶の糸は毎年密かに結ばれます。続けていくとは、その結びつきを作っていくことのように思います。その結び目（旗）を、目に見える形で整えて、展示します。

ヘッドマークデザイン（宝塚大学東京メディア芸術学部渡邊哲意研究室）

那珂湊第一小学校ワークショップにて4年生を対象に、木材合板とカラーフェルトを用いて立体的に制作する、ヘッドマークデザインワークショップを実施します。制作されたヘッドマークは、ひたちなか海浜鉄道の協力により、ワークショップ終了後と、MMMの期間中、営業列車に取り付けて走行します。



43+宝塚大学東京メディア芸術学部

宝塚大学東京メディア芸術学部の教員（中村泰之、橋口静思）がプロデュースを行うワークショッププロジェクトです。

アーティストユニット「43」、「宝塚大学東京メディア芸術学部渡邊哲意研究室」の協力により、2015年度から2021年度までで累計約600名の児童に作品制作の体験を積んでもらうことができました。こうした経験がこの街で暮らす子供たちの考える力、つくる力を育むことにつながることを願っています。

大阪生まれ

筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻総合造形分野修了
宝塚大学東京メディア芸術学部教授

現代美術家

近年はワークショップを中心とした創作・プロデュース活動に移行しつつある。

Yasu Nakamura

中村やす



2016年のワークショップ形式ではなく、テーマそのものである「那珂湊はいいぞ！」という言葉をストレートに表現した。MMM開催期間中那珂湊の商店街に延々と同じフラッグがはためき、しつこいくらいに「那珂湊はいいぞ！」と訴えかける。車道を走る自動車、自転車から見ると視界の端に延々と入ることになり、一番オススメの鑑賞方法である。なお、作者はガルパンおじさんである。「ガールズ&パンツァー」は隣町大洗が舞台じゃないかとおっしゃるかもしれないが、登場キャラクターにはひたちなか市出身という設定のキャラクターも複数存在するので関係ないわけではない。ガルパンはいいぞ！

那珂湊はいいぞ！2021



今年で13年目
茨城 ひたちなか市 芸術祭
みなとメディアミュージアム

アートを買って
芸術祭を応援する



MMM
みなとメディアミュージアム

は、



産×学×芸 が協力し合い

地域住民
地域外企業

大学生、大学機関との連携
小中高生、大学教員など

芸術家
キュレーター

ひたちなか市 那珂湊にアート作品を展示しています



コロナにより 2020 の開催は見送り

2021 開催に向けて只今奮闘中 !!



YANASHER
Masao Takakusa
Ken_Kuro
onakaippai
HIROMI KUBOTA2
o310
OS10
Hagapy
t06846hm
Aya Tomono
reiasn
Keha601
KatsumiKashimura
Izumi Nishioka
nokky123
Gon Eiji
guest5049753c3804
guest8be815503724
asterisk_f
1340d67d1854
aoei456
MAKIER
mi102rh
yoshimoto
kutsuuuu
muskChildren
Masao Takakusa
OgawaTahei
Ken Nakagaki
mitsuru sakurai
swyko
guest79d82e0e7e04
shorie
Chieko Osato
touwa10
honey021021
tominaga1058
YANASHER
chorochan
ocha_koucha
mFIREs
mitsuruisozaki
KanonKitamura
mitsuru sakurai
syokuhondoh
ogamonja
akito_koyagi
kaoriyamakoshi
Riri621
ocha_koucha
Nobuaki Koike
tak0030
miyuboh
Hagapy
hasegawa masaru
Seiya Takashima

クラウドファンディング

茨城県那珂湊の芸術祭 アートを買って芸術祭を応援する!

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた会期変更により、運営が停滞した時期がありました。この期間、芸術祭とは違う形でMMMの目標を達成する方法があるのではないかと考え、クラウドファンディングを実施しました。クラファンではMMM2020→2021参加アーティストから参加希望者を募り、アーティストの作品をリターンとして販売しました。そこで支援いただいたお金は、MMMの運営に充てることとし、利益はMMMとアーティストで半分ずつ分配することにいたしました。結果として、（なんと！）当初の目標であった60万円を大きく超え、約78万円のご支援をいただきました。今後もMMMにしかできない、新たな挑戦を続けてゆく所存です。改めまして、この場をお借りしてクラウドファンディングにご支援いただきましたみなさま、そして一緒にプロジェクトを作り上げたMMM実行委員のみなさまに感謝申し上げます。

ありがとうございました！ 実行委員一同

Crowdfunding



支援者数	56 人
支援額金	778,500 円
売り上げから経費や手数料を差し引いた利益	373,950 円
アーティストへの還付金	366,725 円

協賛企業



那珂湊本町通り商店街振興組合



デザイン・企画・設計・施工

〒310-0841 水戸市酒門町 4342-1
TEL.029-247-8071 FAX.029-247-8006



日、出づる道。

ひたちなか海浜鉄道株式会社

「新宿で最先端のアートやデザインを学び、
MMMと一緒に那珂湊を元気にしよう。」

宝塚大学 東京メディア芸術学部
〒160-0023 東京都新宿区西新宿七丁目11番1号



藤屋ホテル



< 保険・不動産 >



〒310-0053 水戸市末広町1-5-14
TEL.029-225-9574 Fax.029-225-9578
Mail takakura@sweet.ocn.ne.jp

おらが湊鐵道応援団

〒311-1222 ひたちなか市海門町 2-8-13
(ひたちなか商工会議所那珂湊支所内)
TEL.029-263-7811/FAX.029-263-6859
http://www.facebook.com/oborogashioLineSupporters
http://www.line.me/ja/caller?uin=oborogashio
http://twitter.com/ekemino61



ビルダー株式会社

<http://builder-resix.com>



上下水道資材・住宅設備機器・総合卸
勝田機材株式会社
Katsuta Equipment Co., Ltd.

茨城県ひたちなか市西大島1-9-1
TEL.029-273-7211 / FAX.029-273-7700
<http://www.katsuta-kizai.co.jp/>

Builder

KOMATSU

コマツ茨城株式会社

本社
茨城県水戸市吉沢町 358-1
TEL 029-304-3810



コンクリート二次製品・製造販売
小河原セメント工業株式会社
茨城県東茨城郡茨城町小鏡2119-1
TEL.029-292-2618
<http://www.ogawara-c-i.co.jp>



茨城県共済組合整備工場・専修技術認定整備工場
水戸工場茨城県水戸市なべそこテクノパーク内
関東運輸局指定民間車検場 証明書 認証書
新規・整備・修理・点検・定期検査
水戸市本郷3丁目21番9号
TEL (029) 221-2904㈹
FAX (029) 227-2230

NODE MEDICAL



水戸建工業株式会社

建設業 水戸市袴塚 4-10-41 TEL 224-1006

横信建材工業(株)

TEL 029-262-3927
<http://yokoshin-k.jp>



MRS.

一般社団法人
新宿メディア芸術地域活性化推進協会



那珂湊
野外劇

